希臘神話

原隨園著

汲めども盡きせぬ泉とて、西洋文化の上に大きな意義を齎らした希臘神話は、この意味に於て、實に聖書と屢〻比せられる。滾々と湧き出でた眞清水こそは、如何ばかりの藝術の華を咲き誇らせた事であらうか。希臘神話を理解するは種々なる觀點に立つと雖も必要である。

希臘の神話に限らず、あらゆる神話は、夫々、民族の持つ生活意識を自覺する姿が認められる。從つて、希臘を以て、西洋文化の源流と看做すとき、茲に希臘神話を通じて學ばるべき珠玉が祕められて居るのは言を俟たない。

璞をありの儘の姿に眺めやるが如く、希臘神話そのものを味ふも、興味なしとはしないが、此の輝く珠玉が、如何に鑽り出され、如何に磨き上げられるかは、名匠に妙手に待たねばならぬ。

神話が或る民族の信じたる神の世界の描寫である以上、常に發展、生々流轉の一路を辿る。殊に、その活躍の目まぐるしい希臘民族の如きが描き出す繪卷物を繰り展べるとき、之を如實に捉へることは、餘程の技術を要する、種々なる困難を克服するは凡手のよく成し得るところでない。例へば宗教の原始段階にありて、神々を完全に人間に化し去り、やがてこの神々を道德化する端緒にもなるが、神話が却りて宗教を完全に道德化する場合の妨げにもなる虞れがある。

希臘神話が詩人の手によつて進展されて行く場合と、更に哲學者の手に移されてからとは、相當取扱はれ方が違つたと見られるのではないか。

本書は單に神話を羅列的に說いたのではなく、又、神話そのものの發展の姿を攻究したものでもなく、思想的內容の立場に於て說かれて居る。

先づ、神話とは如何なるものかに筆が起されて居る。死すべき運命を負はされた人に對して、不老不死の神々を描き出すとき、人々にとりては如何程不合理と見え、また奇異と觀える事にても神々に結びつけるときにはさうでなくなる。神話は行はれる當時の學問なる所以を明かにし、過去の神話は吾人にとつて、縱令、お伽話に過ぎない場合があつても、これを產み出したる當時の民族にとつては然らざる旨を、明らかに記述されて居る。

次に、希臘の神話そのものの發展に入り、內容の甚だ複雜多岐なる所以を示し、ホメロス、ヘシオドス、オルフィク、及びアレクサンドリア時代の諸家の夫々說きたるを概譬し、斯くして、叙述につき、クロノスの系譜による記述の便宜なるも、讀者の倦怠に陷るを虞れる筆者は、態々これを避ける事にして

(一)人々が周圍の自然について如何に神々を見たか。

(二)彼等の生活技術について神々は如何に關係したか。

(三)彼等が社會生活のうちに神々と如何に接觸を保ちたるか。

として筆が進められる。

希臘神話の發端として、世界の開闢につき、希臘人はヘブライ

人の如くに、神が天地を創造したと云ふを、明白に物語る神話を有しない。併しながら混沌を說き、これに續くものとして、天地の結婚に依りて、巨神、圓眼、百手が生れ來て、神々の世代の生ずるを詳述してある。

次に、この世代の交替に當りて、戰が行はれたと傳へられる所以を說き、更に、ゼエウスの統治する神々に移り行き、茲に、希臘の自然現象の反映が如實に表現されて來る。河泉、天象、風雨海、の項目の下に縷說されて居る。河神の怒、エオスの悲歎、ポセイドンの出自、等興味深いものが相序いで描出されて居る。

希臘神話と生活技術に於て、希臘民族の生活が物語られ對蹠に、牧畜に、將た農業に於ける姿を神々を通じて窺ふことが出來る。更に、技術的方面、乃至は商業貿易に亘つては、想像の翼に乘りて、自由の境地に天翔り行く面影が見られる。巧緻が姦計と變じ、敏捷が詐謀に陷る場合が屢々起る譯である。

最終に、人類發生につき、人は自生者として神の後裔として、或は神の創始として、夫々說かれて居るを擧げてあり、更に、文化事象に說き及ぼして、社會的秩序を守る神と、人間の私生活に關する神が記述されて居る。

希臘人は、恒に、萬物の基準を人においた。されば、神々が人間らしく觀察されて居ることは、餘りにも、有名ではあるが、神と人との間が比較的近く、從つて、兩者の交渉も自然密接にして複雜多岐なるものあるを窺はれる。

以上、極めて概略的なる紹介に止まるが、說いて餘蘊なく、流麗なる筆致の中に說る滋味は、著書の勞作の並々ならぬを觀ると共に、神話を說く一方法を指示されたるを悅ぶものである。挿入されたる三十六個の興當なる說明圖は、その選擇の適正なる理解を助くるに與つて力があるは云ふを俟たない。

著者は自序に於て、「……希臘の神話だけについていふならば、神話について知りたいと云ふ人に卽座に勸めうるやうな書物は邦文には見當らないやうな有樣からいつて（中略）……こんな本でも無いよりは況しではなからうか……」と書かれて居る。これは素より著者の謙遜の床しさを觀ると共に、茲に抱負をも窺はれるものがあると信じる。

西洋史の源を窮めんとする學究にも、唯、希臘神話を概括的ながらも、根柢ある把握をなさんとする一般讀者にも恰好の書として、江湖に推薦したい。（弘文堂發行、定價五〇錢）〔岡島〕

ランケと世界史學

鈴木成高著

歷史は單に事實の集積ではない。歷史が眞の歷史であるためには統一をもたねばならぬ。統一的構造の上に事實は初めて歷史學的事實となる。普遍を缺如した個別は事象であり得ても歷史的事實ではあり得ない。

十九世紀の政治史觀は歷史を政治に從屬せしめた。歷史的過去は政治的未來のために飜譯された。この政治史觀に對して起つた所謂文化史觀は歷史を政治から獨立せしめることに成功した。過